

## 「被災地に何をみるのか—福島県浜通りの『観光』と『生活（ライフ）』」

シンポジウムの感想

柳澤麻衣

今回のシンポジウムには大森淳平・米澤由有郁とともに、司会としてかかわりましたが、里見喜生さん、金井直子さんのお話を聞き、避難区域の現状や被災者の方々の状況など、普段のNEWSを見ているだけではわからない情報に触れることができました。私たちの当たり前の生活の裏に、重たいリスクを抱えて生活をしている方々がいらっしゃることに、原発事故はまだまだ収束していないということ、改めて実感する機会となりました。

クリーンで安全なエネルギーと謳われていた原子力発電ですが、金井さんの事故発生時の避難のお話や、たくさんの方々が仮設住宅に住まれている現状を聞き、政府や東京電力は、こういった事態をしっかりとシミュレーションしていたのか、疑わざるを得ませんでした。また、この場所は線量が高いから避難区域、すぐ隣の場所は線量が低いので避難区域ではないというような、現場のことを考えていない機械的な対応をいつまでも続けていては、復興には繋がらないだろうと感じました。

従来のように、一度にたくさんの人を呼ぶような集客を目的とする大型復興イベントだけでなく、参加した人々に考えるきっかけを与え、結果を地域に還元できるスタディーツアーのような活動はとても重要だと感じました。また、旅館業を活かした支援を行う里見さんのお話を伺い、震災を無かったことにするのではなく、被災地を見つめ、しっかりと知った上で、様々な支援活動を行う必要性は大きいと思いました。

私たちは、メディアを通して、被災地の状況を分かっているつもりになっているかもしれませんが、しかし、メディアを通して「見る」ことや、ハワイアンズや小名浜などの観光地を「見る」だけでは知りえないことが、現地にはたくさんあります。実際の現場、人々の生活を見て、知って、「お金」ではなく「人」を動かしていくことが復興につながっていく——被災地を見るツアーの意味はそこにあるのではないのでしょうか。